

國學院大學學術情報リポジトリ

味耜高彦根神：『日本書紀』天孫降臨章を読む：
特集『日本書紀』研究の現在と未来

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 直樹, Matsumoto, Naoki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000608

味耜高彥根神

— 『日本書紀』 天孫降臨章を読む —

松本直樹

はじめに

『日本書紀』神代下の天孫降臨章（第九段）におけるアヂスキタカヒコネをめぐる神話について、「神代紀」というテキストとしてどのような意味を認めるべきか、本文と一書群とを併せ持つ構造の中で考えてみたい。

天孫降臨章の本文は、アマテラスの子であるアメノオシホミミと、皇祖タカミムスヒの娘との間に皇孫ホノニギが誕生し、タカミムスヒがホノニギを葦原中国の主に立てようとする話

から始まる。ついで、いまだ不穏な状態にある葦原中国を平定する話へと展開する。その概要は次の通りである。

(1) 最初に派遣されたアメノホヒはオホナムチに佞り媚びて復命せず、ついでその子のオホセヒミクマノウシ（タケミクマノウシ）を派遣するも、これも父アメノホヒに従って復命しない。

(2) ついでアメワカヒコを派遣するが、これも忠誠ではなく、ウツシクニダマの娘シタテルヒメを娶り、葦原中国の支配を企んで復命しない。

- (3) アメワカヒコは天からの使者である名無し雉を射殺したことに、タカミムスヒの放った矢に当たって死去する。
- (4) 天上界にてアメワカヒコの鳥による殯が営まれる。
- (5) 葦原中国でアメワカヒコと親交のあったアヂスキタカヒコネが弔問したところ、その姿がアメワカヒコに酷似していたことにより、アメワカヒコの親族・妻子からアメワカヒコ本人と見間違われ、アヂスキタカヒコネはその事に怒って喪屋を斬り伏せる。
- (6) フツヌシとタケミカヅチが使者として派遣され、オホナムチとの交渉がなされ、最後にオホナムチが服属を宣誓し、葦原中国の平定作業が完了する。

登場神の違いなど差異はあるものの、大きな展開としては『古事記』とほぼ一致しており、アメワカヒコとアヂスキタカヒコネをめぐる(2)～(5)の意味するところは、『建国神話』に共通したものであったと理解することが出来る。では如何なる意味を担っていたのだろうか。

アメワカヒコは記紀以外の上代文献には登場することのない存在であり、神名も一般名詞的で、特定の地域や氏族によって祭祀されていた跡を見出すことが出来ない。いっぽうのアヂ

スキタカヒコネは、アヂスキタカヒコネ・アヂスキタカヒコなど神名に若干の揺れを見せながらも、『古事記』『出雲国風土記』『出雲国造神賀詞』において、共通してオホナムチの子とされるなど、上代における信仰の対象としての存在が明瞭である。ことから、(2)～(5)の主題は、アメワカヒコではなく、アヂスキタカヒコネに関わることであったと予測することが出来るだろう。本稿では、まず『建国神話』の枠組みにおけるアヂスキタカヒコネの神話の意味を確認し、その上で、本文と一書を備えた『日本書紀』神代巻の読み方について提言したい。

〈出雲神話〉としての文脈

まず、アヂスキタカヒコネ神話の前後の文脈を確認してみよう。①のアメノホヒについて上代諸文献の記述を確認する。

〈アメノホヒの後胤記事〉

○天菩比命之子建比良鳥命(此出雲國造；等之祖)〔古事記〕^①

○天穗日命(是出雲臣・土師連等祖也)〔日本書紀〕第六段本文^②

○天穗日命、此出雲臣・武藏國造・土師連等遠祖也〔日本書紀〕第七段一書第三

○出雲臣等^我遠神、天穗比命(「出雲国造神賀詞」)
 〈アメノホヒとオホナムチの關係〉

○天菩比神者乃媚附大國主神至于三年不復奏(『古事記』)

○以天穗日命往平之。然此神倭媚大己貴神、比及三年、尚不報聞。故仍遣其子大背飯三熊大人(大人此云于志)亦名武三熊大人。此亦還順其父、遂不報聞(『日本書紀』第九段 本文)

○出雲臣等^我遠神、天穗比命^平、國體見^尔遣時^尔、天^乃八重雲^乎押

別^号、天翔國翔^号、天下^乎見廻^号、返事申給^久、豊葦原乃水穗國^波、

晝^波如五月蠅水沸^支、夜^波如火瓮光神在^利、石根・木立・青水

沫^毛事問^号、荒國在^利。然^毛鎮平^号、皇御孫命^尔、安國^止平久所知

坐^之安^号、己命兒天之夷鳥命^尔、布都怒志命^乎副^号、天降遣^号、

荒^御神等^乎撥平^号、國作^之大神^乎媚鎮^号、大八嶋國現事・顯事

令事避^号。(「出雲国造神賀詞」)

アメノホヒは「古事記」、「日本書紀」本文および一書、「出雲国造神賀詞」において、共通して出雲国造(出雲臣)の祖神であり、それがオホナムチ(大國主神)に「媚」びたという。

「媚」の意味は「古事記」・「日本書紀」本文と「出雲国造神賀詞」とでは異なり、それは葦原中国平定の命令を遂行したか否かについての文献ごとの立場の違いに起因しているよう。天皇讚

美の寿詞であり、出雲国造の大和王権への帰順を述べる「出雲国造神賀詞」の文脈において、「媚」は「鎮撫」に相当する表現として意味づけ直される必要があった⁴⁾。ただ『古事記』『日本書紀』においても、命令を遂行しないアメノホヒを叛逆者として処罰することはない。アメノホヒがオホナムチのもとに到り、その子孫が出雲国造になったという結果については三文獻に共通するのであって、出雲国造によるオホナムチ祭祀の起源を、「古事記」、「日本書紀」本文と「出雲国造神賀詞」それぞれ⁵⁾の立場から説いていると理解すべきである。

アメワカヒコとアチスキタカヒコネに纏わる(2)~(5)を挟み、(6)で葦原中国の平定は第三の使者に託され、オホナムチの国譲りから皇孫の降臨へと展開する。平定作業に関わった神が、『古事記』『日本書紀』間で異なっているのは周知の通りであるが、これがオホナムチの国譲りと同神の出雲鎮座へと展開するものが、「出雲国造神賀詞」をも含めた〈建国神話〉共通の筋書きである。

そもそも〈建国神話〉の主題は皇祖アマテラスとその子孫による建国の歴史を説くことにある。次の系図で示せば、

アマテラス—オシホミミ—ホノニギ—天孫降臨—ホホデミ—○—↓神武

「国譲り」

スサノヲ—オホナムチ（大国主神）「国作り」

〈建国神話〉の主題は、アマテラスの照明力が葦原中国にも不可欠であることを示し（天石屋戸条）、だからその子孫が降臨して葦原中国を統治する（天孫降臨条）ことの正当性を説くことにある。〈建国神話〉を一本化した『古事記』においては、天石屋戸条と天孫降臨条は登場する神々なども共通している。本来的に一直線に繋がる文脈であったことを示している。その間に、スサノヲによるラロチ退治、オホナムチ（大国主神）の国土支配と国作りなどの所謂〈出雲神話〉が挟み込まれている。⁽⁶⁾〈出雲神話〉の内容や紙幅には少なからず差があるものの、『古事記』も『日本書紀』も大筋においては同様であると考ええる。『日本書紀』本文では(1)に当たるアメノホヒの派遣とそのオホナムチへの帰属、(6)のオホナムチによる国譲りと同神の出雲鎮座は、皇祖アマテラスとその子孫による建国の歴史を説くことを主題とする『古事記』『日本書紀』共通の大文脈において、

〈出雲神話〉から皇統を軸とする主題へと文脈を戻す、いわば結節点に当たる。このように考えれば、(2)〜(5)のアメワカヒコ・アヂスキタカヒコネをめぐる一連の神話は、穀霊の死と再生、殯の習俗における思想などを背景に持ちながらも、皇祖アマテラス（日神）とその子孫による建国の〈神話〉の一部として、皇祖に対する出雲の神々の服属の由来として読むべきであり、『古事記』『出雲国風土記』『出雲国造神賀詞』が一致してオホナムチの子とするアヂスキタカヒコネを如何に評価し、位置付けるかが趣旨であったに違いない。

葛城の神としてのアヂスキタカヒネ

アヂスキタカヒコ（ネ）とは如何なる神であったのか。『日本書紀』以外の諸文献の記事を確認しておく。

○故此大国主神娶坐胸形奥津宮神多紀理毗賣命生子、阿遲（二字以音）鉏高日子根神、次妹高比賣命亦名下光比賣命。此之阿遲鉏高日子根神者、今謂迦毛大御神者也。（『古事記』）
『古事記』においては「迦毛大御神」という至高の尊称がつけられている。『古事記』において、他に「大御神」と呼ばれるのが、イザナキとアマテラスだけであることを考えれば、大

国主神の子としてこの尊称を持つことの意味は軽くない。

ただ「此之阿遲須高日子根神者、今謂迦毛大御神者也」の一文は「○○神者、……(者)也」という本文注の形式である。若干の例を挙げてみよう。

- ・此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。
- ・此三柱神者、胸形君等之以伊都久三前大神者也。(宗像三女神)
- ・此神者、坐近淡海國之日枝山亦坐葛野之松尾用鳴鏑神者也。

(大山咋神)

これらは、「現在では特定の氏族がそれぞれ祖先として祭っている神である」、また「現在では或る神社に鎮座している神である」という意味であつて、神代におけるそれぞれの神の事跡ではない。このように、神々についての本文注は『古事記』が成り立った「今」における当該神の状況、あるいは「今」に至るまでの当該神の履歴を(神話)の時間軸の外において示す記事であるから、アヂスキタカヒコネについても、いつ、どのような事情で「大御神」となったかは、『古事記』の中で直接に説明されてはいないのである。よつて、そのことの事情は和銅五年当時の現状など『古事記』の外部から、検証する以外にないことになる。

『出雲国風土記』に散見するアヂスキタカヒコに関する記事を見てみよう。

①賀茂神戸：所造天下大神命之御子、阿遲須積高日子命坐葛城賀茂社。此神之神戸。故云鴨。(神龜三年改字賀茂)(意宇郡賀茂神戸)

②高岸郷：所造天下大神御子、阿遲須積高日子命、甚晝夜哭坐。仍其処高屋造而坐之。即建高椅而、登降養奉。故云高崖。(神龜三年改字高岸)(神門郡高岸郷)

③三澤郷：大神大穴持命御子、阿遲須伎高日子命、御須髮八握于生、晝夜哭坐之辞不通。尔時、御祖命、御子乘舩而、率巡八十嶋宇良加志給頼、猶不止哭之。大神夢願給「告御子之哭由」夢尔願坐、則夜夢見坐之「御子辞通」。則寤問給、尔時「御澤」申。尔時、「何処然云」問給、即御祖御前立去而坐而、石川度、坂上至留申「是処也」。尔時、其澤水活出而、御身沐浴坐。故国造神吉事奏、参向朝廷時、其水活出而、用初也。依此、今産婦彼村稻不食。若有食者、所生子已云也。故云三澤。(仁多郡三澤郷)

①は大和国の葛城賀茂にアヂスキタカヒコの鎮座する社があり、そのための神戸が出雲に置かれているという、『出雲国風土記』編纂時(天平五年成立)の現状を示している。『出雲国

風土記』でもアズスキタカヒコはオホナムチの子であり、その神が大和国内に社を持つことの意味は軽くない。

②③は関連する神話であると思われる。③によれば、アズスキタカヒコが言語不通で、泣くばかりであった原因は、「御祖命」の夢に現れた無名のカミからの信号であったことが分かり、カミはアズスキタカヒコの口を借りて、「澤水」の湧出を告げたのであった。そして、その事績が、出雲国造が「出雲国造神賀詞」奏上のために朝廷に参内する際に、この水を用いることの起源だと言う。言うまでもなく、「出雲国造神賀詞」は出雲国造の代替わりの際の一連の新任式において、天皇から辞令を受けた新任の国造が、長期の潔斎を経て、天皇の前で奏上する寿詞である。

その「出雲国造神賀詞」には、アズスキタカヒコネが大和に鎮座することの意味や起源に関して、次のように記されている。

乃大穴持命^乃申給^久、皇御孫命^乃静坐^平大倭國中^申己命和魂^乎入

咫鏡^取託^倭大物、主櫛^庭玉命^止名^乎称^号大御和^乃神奈備^乎坐、

己命^乃御子阿遲^須伎高孫根^乃命^乃御魂^乎、葛木^乃鴨^乃神奈備^乎坐、

事代主命^乃御魂^乎、宇奈提^乎坐、賀夜奈流美命^乃御魂^乎、飛鳥^乃

神奈備^乎坐^乎、皇孫命^乃近守神^止貢置^号、八百丹杵築宮^乎静坐^乎。

オホナムチが国譲りを行うに際し、自らの子であるアズスキ

タカヒコネの御魂を天皇の守護神として葛木に鎮座させたと記されていて、出雲国造が神祇祭祀を統括する出雲の地にその神戸があるとする『出雲国風土記』の記述と呼応する。

これらのことを踏まえれば、少なくとも天平五年当時には、アズスキタカヒコ（ネ）は出雲国造の大和王権への服属、そしてオホナムチから皇祖への国譲りにおける象徴的な存在として大和の葛城に鎮座していると理解されていたのである。和銅五年当時の状況までを正確に知ることは出来ないが、『古事記』が同神を「今」は「迦毛大御神」であるとしているのも同じ事情によると推察することが許されるのではないだろうか。アズスキタカヒコネの『古事記』における異例に高い地位は、もちろん無条件なものではなく、大国主神による国譲りを終え、歴代天皇による治世が続き、出雲国造が大和王権に帰属している現在におけるものだとするのが本文注の意図するところである。⁽¹⁰⁾

アズスキタカヒコネ周辺の系譜

これまで、「出雲国造神賀詞」を含めた広い意味での（建国神話）の範疇において、アズスキタカヒコネが大和国の葛城に鎮座することの意味を考えてきた。前に述べたようにアメワカ

ヒコが信仰の実態のない存在であることを合わせて考えると、『古事記』および『日本書紀』本文(2)～(5)の一連の神話は、叛逆者アメワカヒコと見間違われたアズスキタカヒコネが、それとは別神であること、つまり決して叛逆者ではないことを証明するものであったと考えることが出来るだろう。

『古事記』において、そのことを証明するための重要な存在が、アズスキタカヒコネの妹のタカヒメ(シタテルヒメ)である。

○故阿治志貴高日子根神者、忿而飛去之時、其伊呂妹高比賣命、思躰其御名。故歌曰「……美多迹 布多和多良湏 阿治志貴多迦比古泥能迦微曾」也。

○天若日子降到其国、即娶大國主神之女下照比賣、亦慮獲其國、至于八年不復奏。

○天若日子之妻下照比賣之哭聲与風響到天。

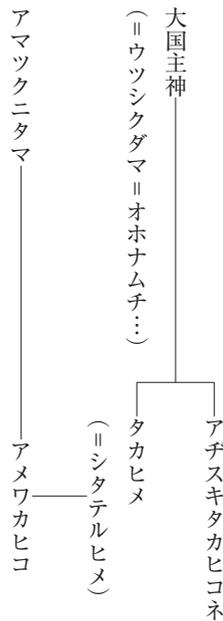
アメワカヒコの妻としてはシタテルヒメ、アズスキタカヒコネの妹としてはタカヒメであるという認識があつたと思われるが、その二つの神名が、大國主神の系譜において、

阿遲(二字以音) 鉏高日子根神、次妹高比賣命、亦名下光比賣

と同神の異名とされている。これによって、アメワカヒコの父や天上での妻さえも見紛うほどに酷似した両神を、確かに峻別

することの出来る存在が用意されている。なお、アメワカヒコはアマツクニタマを父に持ち、アズスキタカヒコネは大國主神(亦名ウツシクニタマ)を父としており、出自の違いも『古事記』においては明瞭である。系譜を図に示すと次の通りである。

【『古事記』の系譜】



では『日本書紀』第九段の本文ではどうだろうか。

故、高皇産靈尊、更會諸神、問當遣者。僉曰「天國玉之子天稚彦、是壯士也。宜試之」。於是、高皇産靈尊、賜天稚彦天鹿兒弓及天羽羽矢、以遣之。此神亦不忠誠也。來到即娶躰國玉之女子下照姫(亦名高姫、亦名稚國玉)、因留住之曰「吾亦欲馭葦原中國」、遂不復命。是時高皇産靈尊、怪其久不來報、乃遣無名稚伺之。(アメワカヒコは天探女

の進言に従い雉を射殺し、タカミムスヒの矢に当たつて死
去する。）

天稚彦之妻下照姬、哭泣悲哀、聲達于天。是時、天國玉聞
其哭聲、則知夫天稚彦已死、乃遣疾風、舉尸致天、便造喪
屋而殯之。（八日八夜、鳥による殯が行われる。）

先是、天稚彦在葦原中國也、與味耜高彥根神友善。（味耜、
此云阿賦須岐）故、味耜高彥根神昇天弔喪。時此神容貌、
正類天稚彦平生儀。故、天稚彦親族妻子皆謂「吾君猶在」、
則攀牽衣帶、且喜且慟。時、味耜高彥根神、忿然作色曰「朋
友之道、理宜相弔。故、不憚污穢、遠自赴哀。何為誤我於
亡者」、則拔其帶劍大葉刈（刈、此云我里、亦名神戶劍）、
斫仆喪屋。此則落而為山。今在美濃國藍見川之上喪山是也。
世人惡以生誤死、此其緣也。

第九段本文におけるアメワカヒコとアヂスキタカヒコネの神
話は以上である。アメワカヒコは『古事記』同様に、シタテル
ヒメを娶つて葦原中國の支配を企て、シタテルヒメにはタカヒ
メという亦名があると記されているが、タカヒメの歌によるア
ヂスキタカヒコネの正体明かshはない。ところで、『日本書紀』
本文においては、アヂスキタカヒコネ・アメワカヒコ・ウツシ
クニダマ・シタテルヒメといった全ての登場神が初出なので

あつて、アヂスキタカヒコネの出自については、第九段はもと
より前後の本文を見てもどこにも記されていない。

そこで一書に目を配つてみたい。アメワカヒコとアヂスキタ
カヒコネの神話を載せるのは第九段一書第一と一書第六であ
る。まず一書第六から見ることにする。

一書曰、天忍穗根尊、娶高皇產靈尊女子栲幡千千姫萬幡姫
命、亦云高皇產靈尊兒火之戸幡姫兒千千姫命而、生兒天火
明命。次生天津彦根火瓊瓊杵根尊。其天火明命兒天香山、
是尾張連等遠祖也。及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊、於葦原中國
也、高皇產靈尊、勅八十諸神曰「葦原中國者、磐根木株草
葉、猶能言語。夜者若燦火而喧響之、書者如五月蠅而沸騰
之、云々。

時高皇產靈尊勅曰「昔遣天稚彦於葦原中國、至今所以久不
來者、蓋是國神、有強禦之者」。乃遣無名雄雉往候之。此
雉降來、因見粟田・豆田、則留而不返。此世所謂、雉頓使
之緣也。故復遣無名雌雉。此鳥下來、為天稚彦所射、中其
矢而上報、云云。

是時、高皇產靈尊、乃用眞床覆衾、裹皇孫天津彦根火瓊瓊
杵根尊而、排披天八重雲、以奉降之。故稱此神、曰天國饒
石彦火瓊瓊杵尊。：（第九段一書第六）

本文と同じくタカミムスヒを司令神とする伝承であり、二箇所ある中略の部分にはそれぞれ「アメノホヒとその子がオホナムチに媚びて復奏せず、次に天若彦を派遣したこと」、「天若彦が返し矢に当たって死に、その親族によって殯が営まれ、その時、甲間に訪れたアヂスキタカヒコネがアメワカヒコに見間違われ、そのことに怒りを感じたアヂスキタカヒコが喪屋を斬り伏せる」というほぼ本文と同じ内容が含まれていたと思われる。皇祖の系譜に登場する神の名や、二度に互る雉の派遣など、本文とは異なる要素を伝えながら、アヂスキタカヒコネ・アメワカヒコの出自等について本文以上の情報はない。

続いて、第一の一書を見る。

一書曰、天照大神、勅天稚彦曰「豊葦原中國、是吾兒可王之地也。然慮、有殘賊強暴横悪之神者。故汝先往平之。乃賜天鹿兒弓及天眞鹿兒矢遣之。天稚彦受勅來降、則多娶國神女子、經八年無以報命。(アメワカヒコはアマテラスの派遣した雉を射殺し、アマテラスの投げ返した矢に当たって死去する。)

時天稚彦之妻子、從天降來、將柩上去而、於天作喪屋殯哭之。先是、天稚彦與味耜高彥根神友善。故味耜高彥根神、登天弔喪大臨焉。時此神形貌、自與天稚彦相似。故天稚彦

妻子等、見而喜之曰「吾君猶在」。則攀持衣帶、不可排離。時、味耜高彥根神忿曰「朋友喪亡。故吾即來弔。如何誤死人於我耶」、乃拔十握劍、斫倒喪屋。其屋墮而成山。此則美濃國喪山是也。世人惡以死者誤己、此是緣也。

時、味耜高彥根神光儀華艷、映于二丘二谷之間。故喪會者歌之曰、或云、味耜高彥根神之妹下照媛、欲令衆人知映丘谷者、是味耜高彥根神、故歌之曰「阿妹奈屢夜、乙登多奈婆多廼、汗奈餓勢屢、多磨廼彌素磨屢廼、阿奈陀磨波夜、彌多爾、輔柁和柁羅須、阿泥素企多迦避願禰」。又歌之曰

：(第九段一書第一)

アメワカヒコを派遣し、アメワカヒコを処刑する主体が天神としてのアマテラスになっていて、タカミムスヒを司令神とする本文とは系統の異なる伝承である。タカミムスヒを司令神とする伝承、アマテラスを司令神とする伝承の双方に、アメワカヒコとアヂスキタカヒコネをめぐる神話が共通してあったことが分かる。この一書では、「或云」として、アヂスキタカヒコネの妹のシタテルヒメが登場し、アヂスキタカヒコネの正体を衆人に明らかにする目的で「夷振」という二首の歌を詠む伝承が載せられている。⁽¹²⁾

さて、先に見た本文と一書第一の記事における神々の系譜を

それぞれ図示すると次の通りである。

【第九段本文の系譜】

アズスキタカヒコネ

ウツシクニダマ—シタテルヒメ(=タカヒメ・ワカクニダマ)

アマツクニダマ—アメワカヒコ

【第九段一書第一の系譜】

兄アズスキタカヒコネ

妹シタテルヒメ

次に、両伝承の内容を合わせて、系譜を作ると次のようになる。『日本書紀』神代巻の読み方として、こうした「操作」が求められていると考えていて、その点は次節以降で述べることにする。

【統合系譜Ⅰ】

ウツシクニダマ
├── アズスキタカヒコネ
└── シタテルヒメ

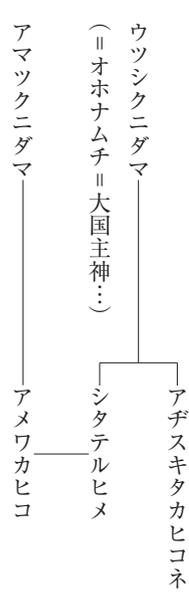
アマツクニダマ—アメワカヒコ

本文と一書の伝承を総合した時、初めて、ウツシクニダマの子として、アズスキタカヒコネとシタテルヒメの兄妹があり、シタテルヒメがアメワカヒコの妻になることになる。では、アズスキタカヒコネとシタテルヒメの父親であるウツシクニダマとは如何なる存在であるか。それが分かるのは、第八段の一書第六をおいて他にない。

一書曰、大國主神、亦名大物主神、亦號國作大己貴命、亦曰葦原醜男、亦曰八千戈神、亦曰大國玉神、亦曰顯國玉神。其子凡有一百八十一神。(第八段一書第六)

ウツシクニダマは大國主神の亦名の一つとされている。その子は凡そ一八一神とあるが、具体的な神名は記されていない。この一書の情報を先に示した【統合系譜Ⅰ】に加え、新たに系譜を作ると次のようになる。

【統合系譜②】



第九段におけるタカミムスヒ系の伝承とアマテラス系の伝承、さらに第八段の一書を統合することによって、初めてアヂスキタカヒコネとその妹シタテルヒメがウツシクニダマ（ニ大国主神ニオホナムチ）の子として位置付けられることになる。

『日本書紀』天孫降臨章を読む

天孫降臨章（第九段）の本文には、アメワカヒコの所業について次のように記されていた。

來到即娶顯國玉之女子下照姬（亦名高姫、亦名稚國玉）、因留住之曰「吾亦欲馭葦原中國」、遂不復命。

『古事記』にもほぼ同内容の記述があるが、『日本書紀』本文だけを読む限り、ウツシクダマの娘であるシタテルヒメ（ともに

本文初出）を娶ることが、どうして葦原中国の支配を企むことに繋がるのか、その間に因果関係を認めることは出来ない。そこにシタテルヒメの父親であるウツシクニダマが大国主神ニオホナムチであったとする第八段一書第六の情報を入れることによって、この結婚をいわば政略結婚であると読むことが出来るのである。

これまで著書・論文等において、『日本書紀』神代巻の読み方についての提言を行ってきた¹⁹⁾。改めてポイントを簡潔に纏めると、次の通りである。

1、神代紀の文脈は、本文を繋ぐことを基本とする以外にない。段ごとに数の違う一書を段を越えて繋げる読みは求められていない。古本系諸本における本文重視の書式に配慮すべきである。

2、各段の本文と一書群とは内容的に両立し得ない。

例えば第五段（四神出生章）では、日神オホヒルメ（亦名アマテラス）が三通りに誕生する。一書群の存在は本文の絶対化において不利である。

3、一書の情報がないと本文の筋が通らないことがある。

この点、第九段において最も顕著である。第八段本文からの流れを確認しておく。

第八段本文

〔素戔嗚尊・奇稻田姬〕乃相與遵合而、兒生大己貴神。因勅之曰「吾兒宮首者、脚摩乳・手摩乳也」。故、賜號於二神、曰稻田宮主神。已而素戔嗚尊、遂就於根國。

第九段本文

天照大神之子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、娶高皇產靈尊之女栲幡千千姬、生天津彦彦火瓊瓊杵尊。故、皇祖高皇產靈尊、特鍾憐愛以崇養焉。遂欲立皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊、以為葦原中國之主。然彼地多有螢火光神、及蠅聲邪神。復有草木威能言語。故、高皇產靈尊、召集八十諸神而、問之曰「吾欲令撥平葦原中國之邪鬼。當遣誰者宜也。惟爾諸神、勿隱所知」。僉曰「天穗日命、是神傑也。可不試歟」。於是俯順衆言、則以天穗日命往平。然此神、佞媚大己貴神、比及三年尚不報聞。……故、高皇產靈尊、更會諸神、問當遣者。僉曰「天國玉之子天稚彦、是壯士也。宜試之」。於是高皇產靈尊、賜天稚彦天鹿兒弓及天羽羽矢以遣之。此神亦不忠誠也。來到即娶頸國玉之女子下照姬（亦名高姬、亦名椎國玉）、因留住之曰「吾亦欲馭葦原中國」、遂不復命。……二神（經津主神・武甕槌神）於是降到出雲國五十田狹之小汀、則拔十握劍、倒植於地、踞其鋒端而、問大己貴神曰「高

皇產靈尊、欲降皇孫、君臨此地。故先遣我二神、驅除平定。汝意何如。當須避不」。

第八段本文はスサノヲの子としてオホナムチが誕生したところで終わり、それが第九段になると、何の断りもなく葦原中国の支配者となっていて、天上からの使者は迷いなくオホナムチのもとを訪れる。また、葦原中国の平定から皇孫降臨までの一切を指揮するのがタカミムスビであるが、タカミムスビは本文初出であり、それがなぜ『日本書紀』における至高の称号としての「尊」号（第一段本文）を有する「皇祖」として、諸神を「召集」するのかについて一切の説明がない。

その文脈の亀裂を埋めるためには、一書の情報が必要になる。タカミムスビは、第一段の一書第四で天地創成の直後に「尊」号をもった造化神として誕生し、第八段の一書第六では「天神」と位置づけられている。また、オホナムチについては、第八段の一書第六で「大國主神」として国の支配を遂げ、国作りを行ったと記されている。これらの一書の情報が頭の中に入っていれば、第八段本文から第九段本文への接続を辛うじて理解することが出来るのである。

また第九段における一書の内容が、後の神武紀に繋がることも指摘することが出来る。

(神日本磐余彦天皇) 謂諸兄及子等曰「昔我天神、高皇産靈尊・大日靈尊、舉此豊葦原瑞穗國而、授我天祖彦火瓊瓊杵尊」。(神武即位前紀)¹³⁾

前に示した第九段本文において、皇孫ホノニギを葦原中国の主と定め、降臨を指揮したのはタカミムスヒ一神であったが、一書第一ではアマテラスが、一書第二ではタカミムスヒとアマテラスとが司令神となっている。また第五段本文において、オホヒルメの亦名がアマテラスであると記されていて、タカミムスヒ系・アマテラス系・日神系など系統の異なる伝承の情報を総合した時に、初めて、先の神武の発言が有効になるのである。

『日本書紀』は神武紀以降の歴代天皇紀を原則として一本化した「通史」として記すが、それは神代巻の各段本文に一書の情報までを総合した上で成り立つことを宣言していると受け取ることが出来るだろう。

以上のように、本文中心の神代巻を、本文と相容れない内容を伝え、いっぽうで本文の通説に不可欠でもあり、「通史」において有効な一書群を含むテキストとしてどう理解するかが問題なのである。本文と一書群を総合した神代紀の読み方が求められるのである。誤解を恐れず言えば、かつて「記紀神話」などと無批判に総称されていたような漠然とした〈建国神話〉の

大きな流れの中に本文をおいて読むこと、これが『日本書紀』神代巻が求めた読み方なのではないだろうか。

おわりに

『日本書紀』天孫降臨章(第九段)におけるアメワカヒコ・アズスキタカヒコネの神話については、本文だけを通読しても〈建国神話〉の文脈におけるその意味を読み取ることが出来ない。当該神話の主要な登場神はいずれも本文初出であり、その出自も殆ど記されていないためである。

本文と一書群とを総合したところに成り立つ神代紀の読み方に従って、本文に本来的に系統の異なる第九段の一書第一、さらに第八段の一書第六などの情報を入れ、神代紀全体として浮かび上がってくる神々の系譜を意識することによって、アズスキタカヒコネがオホナムチ(「ウツシクタマ」大国主神)の子であるという『古事記』『出雲国風土記』『出雲国造神賀詞』と同様の位置づけが見えてくる。

『古事記』『日本書紀』の編纂、成立の頃から出雲服属の象徴的存在であったと思われるアズスキタカヒコネの立場を、叛逆者であるアメワカヒコと対照化して示すのが〈建国神話〉とし

ての当該神話の趣旨であり、それが本文と一書群（諸系統の伝承）を総合して成り立つ『日本書紀』神代巻というテキストの読みとして最も適当であると考える。

注

- (1) 『古事記』の文は真福寺本（国宝真福寺本古事記）桜楓社、一九七八年を底本として筆者が校定した。便宜上、字体を一部通行字に改め、割注は括弧に入れて示した。以下同じ。
- (2) 『日本書紀』神代巻の文は吉田本（『京都国立博物館所蔵国宝吉田日本書紀』勉誠出版、二〇一四年）を底本として筆者が校定した。便宜上、字体を一部通行字に改め、割注は括弧に入れて示した。以下同じ。
- (3) 「出雲国造神賀詞」の文は九條家本延喜式祝詞（沖森卓也編『東京国立博物館蔵本延喜式祝詞総索引』汲古書院、一九九五年）を底本として筆者が校定した。以下同じ。
- (4) 飯泉健司「アメノホヒの「嬬」」(古事記研究大系5—1『古事記の神々(上)』高科書店、一九九八年六月)参照。
- (5) 拙著『古事記神話論』(新典社、二〇〇三年) 第三部第七章「アメノホヒはなぜ派遣されるのか」参照。
- (6) 大和王権の手に成った〈建国神話〉は、神話としての説得力を維持するために地方の神話や神々の信仰を取り入れ、それらを利用しながら編纂されたものであり、その代表格がスサノヲ・オホナムチなどの出雲の神や神話であったと考えている。拙稿「神話」が作る国家―列島古代の精神史―(『文学・語学』二二七、二〇一九年二月)、拙著『神話で読みとく古代日本―古事記・日本書紀・風土記』(ちくま新書、二〇一六年)等参照。
- (7) 松村武雄『日本神話の研究(四)』(培風館、一九五八年)、松前健『日本神話と古代生活』(有精堂、一九七〇年)、吉井巖『天皇の系譜と神話(二)』(塙書房、一九七六年)、服部且「天若日子神話―阿遲志貴高日子根神をめぐって―」(『古代文学』七、一九七七年二月)、中村啓信「アチシキタカヒコネは何故アメリワカヒコに似ているのか」(『國學院雑誌』一〇二一六、二〇〇一年六月)等、様々に論じられてきた。
- (8) 拙著前掲注5、第II部第一章「ムスヒ二神の「隠身」について」参照。
- (9) 『出雲国風土記』の文は細川家本(『出雲国風土記諸本集』勉誠社、一九八四年)を底本として筆者が校定した。便宜上、字体を一部通行字に改め、割注は括弧に入れて示した。以下同じ。
- (10) 『古事記』のアチシキタカヒコネに関しては、拙稿「迦毛大御神アチシキタカヒコネ」(『国語と国文学』八五―三、二〇〇八年三月)参照。
- (11) 三宅和朗「記紀神話の成立」吉川弘文館、一九八四年、参照。
- (12) 『日本書紀』一書第一における二首の「夷振」は一見して内容面での関係がなく、その点をめぐって諸説あることは承知しているが、行論の都合上、詳細は割愛する。

一書内の本伝では「喪會者」の歌、「或云」ではシタテルヒメの歌となっており、後者についてはアチシキタカヒコネであることを証すためだという目的まで記載されている。この目的に合った歌は『古事記』とほぼ同内容を伝える一首目である。本居宣長は二首目が紛れ込んだと述べ(『古事記傳』本居宣長全集第十巻、筑摩書房、一九七八年)、山路平四郎は歌謡の形としては二首構成の『日本書紀』の方が古いと指摘している(『記紀歌謡評釈』東京堂出版、一九七三年)。詠者の件も含め、歌謡本来の姿と『古事記』『日本書紀』という作品における歌との関係性など問題は小さくないが、アチシキタカヒコネの正体明かしが、少なくとも『建国神話』における目的の一つとして『古事記』

- 『日本書紀』に共通することを確認して論を進める。
- (13) 拙稿「神代紀の構造」(『国語と国文学』八七—一一、二〇一〇年十一月)、
「神代記・紀の〈読み〉方を考える」(『文学』一三一—一、二〇一二年
一月)、『日本書紀』神代巻の構成」(『上代文学』二二四、二〇二〇年
四月)、拙著前掲注 6 等参照。
- (14) 『日本書紀』卷三の文は、ト部兼右本(天理図書館善本叢書『日本書
紀兼右本二』八木書店、一九八三年)を底本として筆者が校定した。
- (15) 『建国神話』の諸系統については、三品彰英『建国神話の諸問題』(平
凡社、一九七一年)、北川和秀「古事記上巻と日本書紀神代巻との関係」
(『文学』四八一—五、一九八〇年五月)、神田典城『記紀風土記論考』(新
典社、二〇一五年)等に詳しい。